



俺^{たぶん}

のことが

好きな

幼馴染に

中出し

してみた



俺は昨日まみと…
初めてエッチなことをした…

胸…
触って…

最初は予習の…
はずだったのに…

ほんとに
昨日のことだったのか……

もうこれから
どんな顔して…
会えばいいんだよ……



うわ、思い出したら…
顔熱っ……



まなと………
キスして、触れて……

でもあの頃は—



あの頃はただ一緒に
歩けるだけで嬉しかった

まなはいつも無表情だったけど
俺の手はしっかり握ってくれてた

「今日も隣にいてくれる」
それが、何よりの安心だった



まなを意識すると
股が勝手に反応してしまう

やめてくれよ
そんな顔……

恥ずかしいのにそれを
見透かすようにまなは少し笑ってた

びしょ濡れの制服越しに
まなの肌が透けて見えて

見ちゃいけない
でも見てしまう

まなは何も言わずただ前を見ていた
バレそうでドキドキした





あの日は…
一瞬何が起きたのか…
わからなかった

気づいたときには
まなが俺の前に立ってた

守られてたのは
俺の方だった

その事実が、妙に悔しくて
でもちよっとだけ…嬉しかった

どうしてあの時あんなに
自然と接することができたんだろう

今は俺が緊張してまなと
まともに話せないと言っのに…







中学の頃みたいに
もう手は繋がなくなった

何となくお互いが少しだけ
意識してるのかもしれない

昔よりも話すことは
減ったのになぜか
不思議と落ち着く



昔と変わらないはずの日常
だけど今はまなの：
顔が直視できなかった

昨日の初めてのエッチを
思い出すたびに
ちんぽが騒がしくなる

たぶん、まなも：
同じだったと思う

手を伸ばせば届く距離
でも、今日はなんだか遠かった

それでも――
まな、やっぱり君のことが――

放課後の静けさが染みついた更衣室
汗と柔軟剤の匂いが漂うなか

まなは静かに隅で隠れてた

あの夜、彼が…
眠ってしまった隙に—

指が勝手に
シャッターを押していた

これ、バシたら…
でも…





その他愛ない会話さえ、まなには遠く、霞んでいた



ふたりの会話も
気配もすべてが遠くなる

駿のことしか
頭になかった

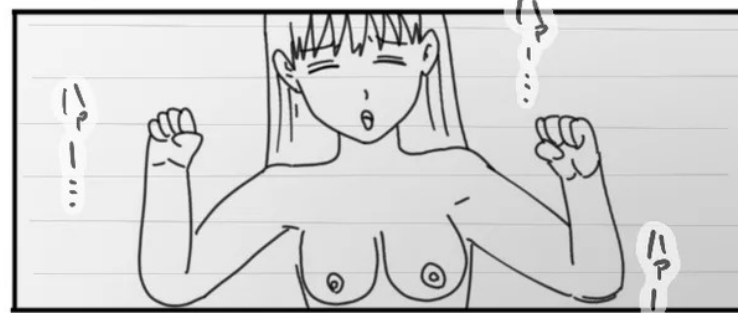
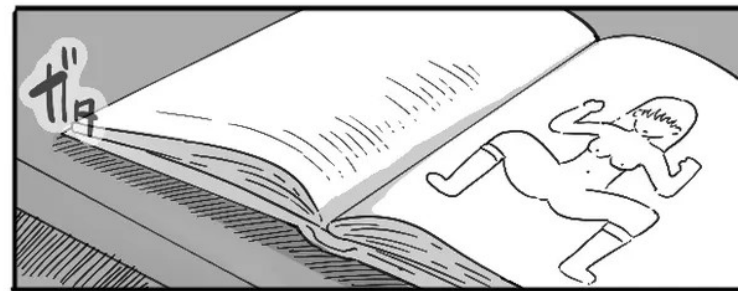
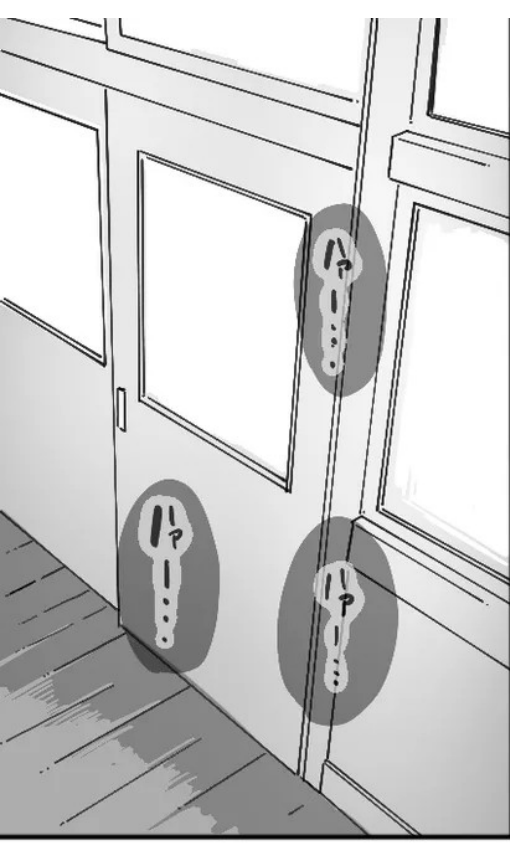
カーテンの奥で
ひとり達した少女は――

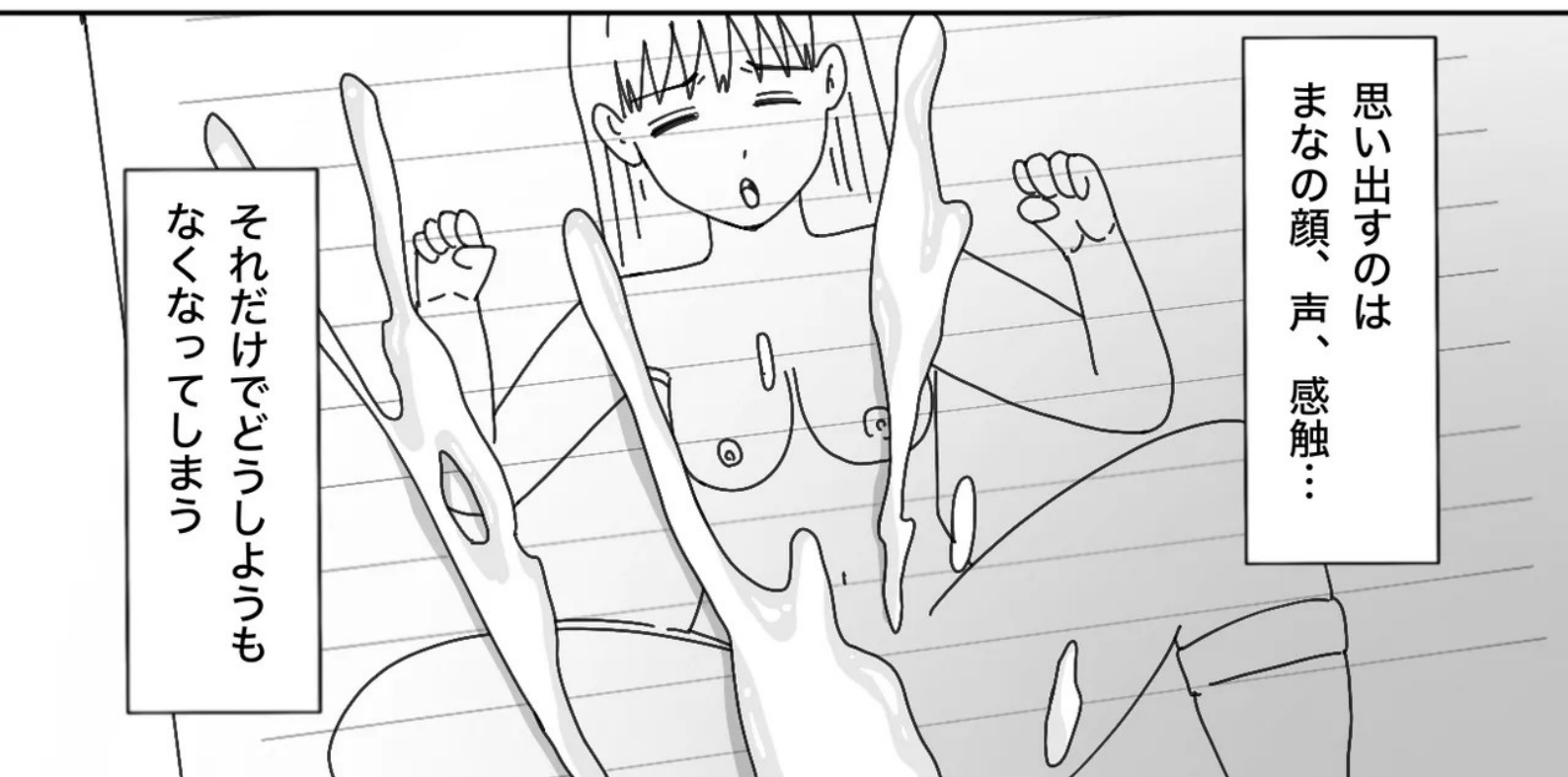
その罪悪感すらも
快感に溶かしていく

誰かいる？

なんか……
やっぱ出よっか

空いてるとこ使お





思い出すのは
まなの顔、声、感触…

それだけでどうしようも
なくなってしまう



言葉はいらなかった



心が前へ進んだ



行こう……



ただ目が合った瞬間





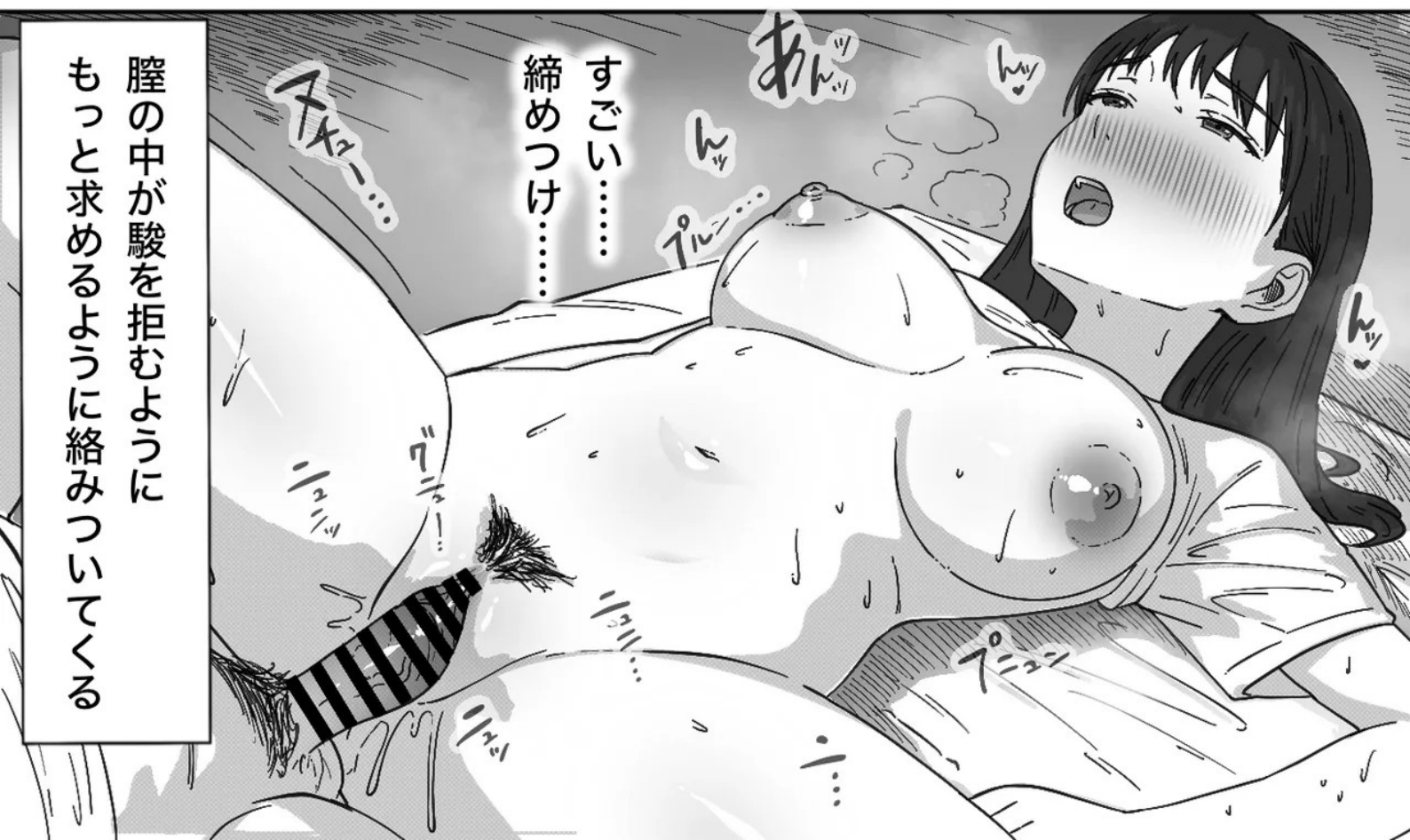
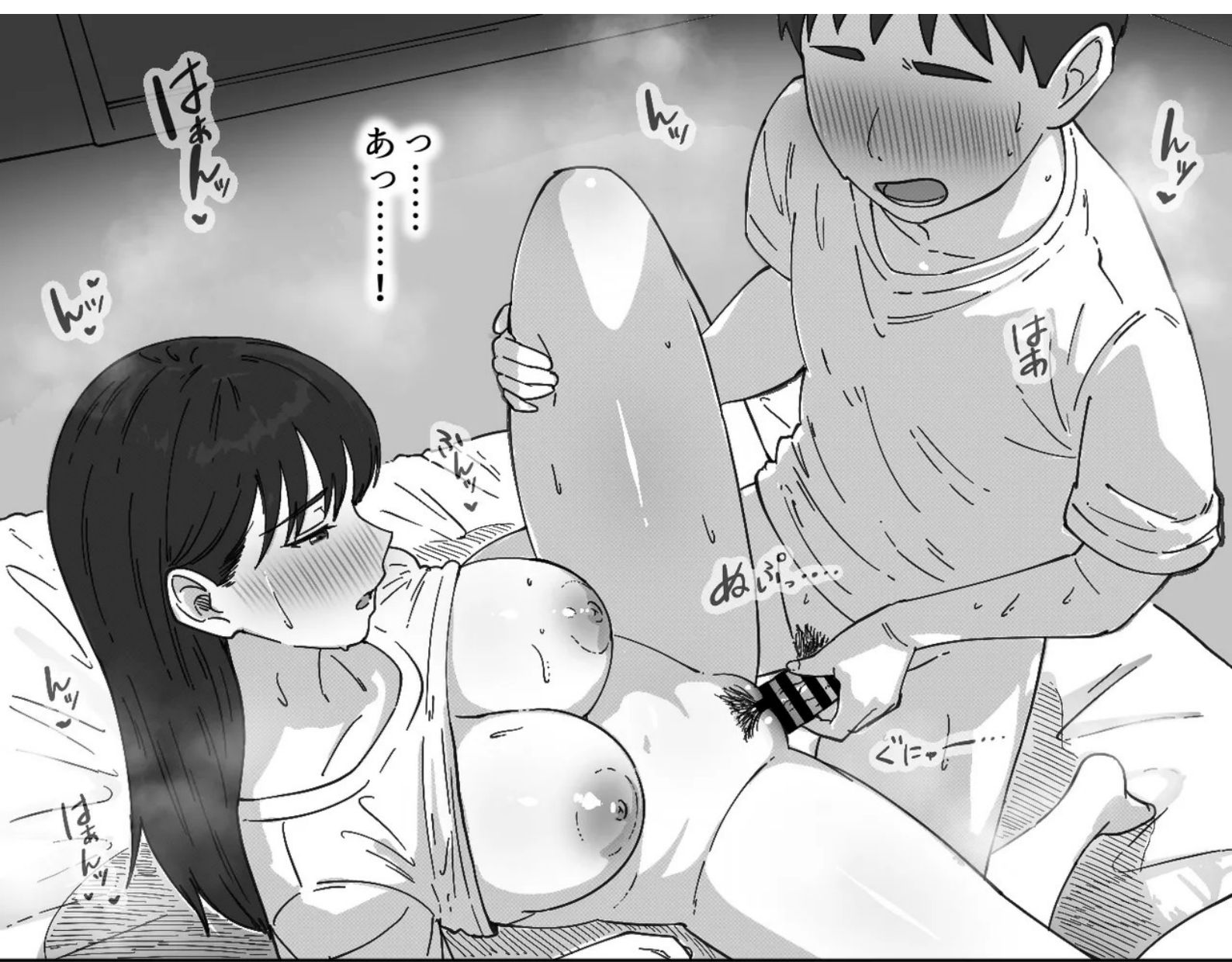




ありがとう
ていうかごめん...

恥ずかしさも照れも
心を近づける要素だった



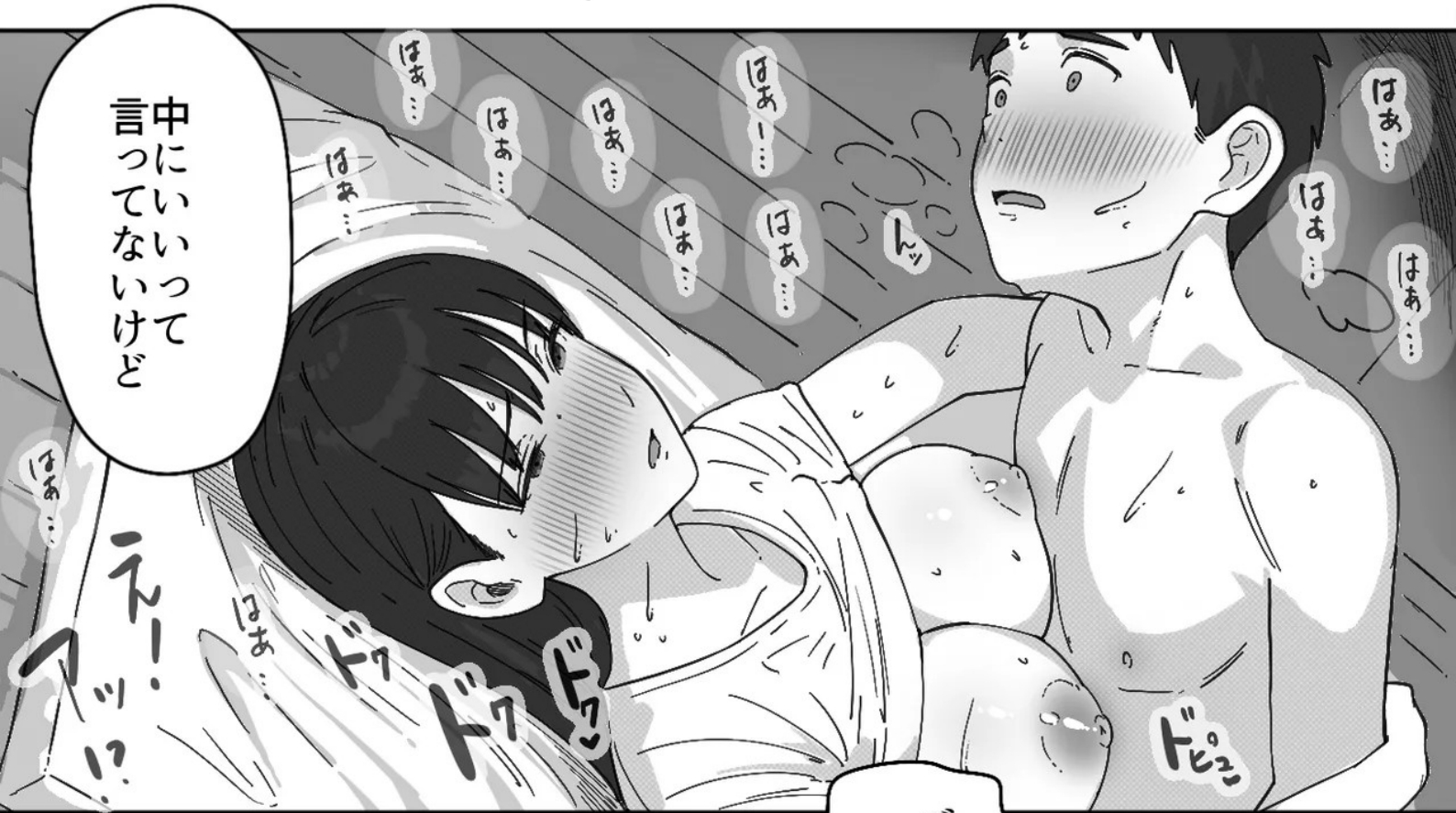


膣の中が駿を拒むように
もっと求めるように絡みついてくる





中、いっぱい
でてる……





来るに…
決まってるじゃん!



予習の先にあったもの
それは、ふたりで



FIN

